

He is a Gaijin (外人) player who speaks perfect Japanese.

—一生懸命という免罪符—

いまから40年くらい前、プロ野球開幕前のオープン戦での出来事です。前年より頭角を現してきたロッテの落合選手が打席に入りましたが、バットを1球も振らずに三振。それに対して当時の巨人軍王選手が、「オープン戦でも彼はっと一生懸命しなければいけない。投手に対して失礼だ」とコメントしました。

一方、落合選手の言い分はこうでした。「自分が打てる球かどうかを打席で観察した。そして打てることがわかったのでバットを振らなかった」とのことでした。しかし、落合選手は、当時の野球ファンやマスコミから「開幕前のキャンプで一生懸命していないようにみえた」ということでした。

その頃、開幕前のキャンプでは一生懸命に練習をしていたがペナントレースでよい結果を残せなかった選手がいました。しかし、彼がキャンプで一生懸命に練習していたことを多くのファンやマスコミが知っていたので、その結果を非難されませんでした。しかし一方で、キャンプで一生懸命やっていないようにみえて結果が悪ければ、その選手は強く非難されていました。

その十数年後、著者の名前（外国人です）は忘れましたが、このタイトルのようなエッセイが発表されました。この文の意味は、日本人の多くは何かの行動をする時、目標が明確でなくとも方法に成算がなくとも、一生懸命するということを一番重要に考えるということです。当時私は、無意識のうちにこの日本人的な感覚を有していましたが、それは世界標準とは異なり日本独特の文化なのだとして強く認識したことを鮮明に覚えています。

落合選手にとっては、最終的にペナントレースでよい成績をあげるという目標設定が明確だったのでしょうか。そして、それに到達できるような方法を自ら考えて、人にみられないところでたぶん努力していたのでしょうか。オープン戦の出場は目標を遂行する手段であり、一生懸命に練習したということは、結果が悪かった時の免罪符にはならないという考え方だったと思います。それは当時の多くの国民や日本人プレイヤーとは異なり、助っ人外国人プレイヤーと考え方が似ていたことから、「完璧な日本語を話す外人プレイヤー」というフレーズとなったのでしょうか。

一生懸命に目標に向かって走るということは、特に高校生以下では重要です。信頼のある指導者が目標を作製してくれ、その目標に到達できるようにサポートもしてくれます。単に、指示されたことに対して一生懸命にさえすればよいのです。しかし、自立して社会にいれば、一生懸命さに加えていわゆる PDCA という目標の立て方やそれに対する方法や自己評価、フィードバックを考える必要があります。

実社会では「睡眠時間を削って一生懸命にがんばりました」は結果が悪かつ

た時の免罪符にはなりません。立てた目標は妥当だったのか？それに対して考えた具体的な方法は到達可能なものであったのか？実行してからの結果の評価（検証）は？という当振り返りが必要です。関与する全員で最終の目標を共有していたかということも重要です。一生懸命したかどうかという感情論は不要です。

現在のコロナ対策、ワクチン対策はとても日本的な考え方に基づいていると思います。有事である現在、タイトルのようなリーダーを待望します。

伊賀幹二
伊賀内科・循環器科
2021.7.12